

⑤之光教団 春季大祭・豊穰祈願祭 教主様お言葉

於：救世会館

皆様、本日は春季大祭、そして、豊穰祈願祭おめでとうございます。

只今は、成井理事長より、新年度に向かう⑤之光教団の取り組みについて、力強いご挨拶をいただき、まことにありがたく思っております。

そのご挨拶を通して、⑤之光教団の皆様が明主様の<sup>まこと</sup>真の信徒たるべく、明主様の全く新しい救いの福音に目覚め、喜びと希望をもって、自らのうちにおられる明主様と共に、主神にお仕えしていかれるというご決意をお伺いし、大変頼もしく思い、大いに勇気づけられました。

また、先程は、〇〇所長より、ご自身が体験させられ、そして、気づかされたことをご発表いただき、ありがとうございました。

私どもの心は、自分や家族に関わること、また、自分を取り巻く人間関係など、自分に直接関わる問題に対し、たとえそれが取るに足らないと思われることであっても、様々に反応いたします。

毎日見聞きする、大小様々なニュースや情報に対しても、何らかの反応を起こします。

私どもは、そうした心の反応の中に、主神からの大切なメッセージがあることに気づく必要があると思います。

それと同様に、私どもは、聖地を思い、聖地を訪れた時、また、明主様のみ教えやお歌、あるいは、ご事蹟を通して、何かを感じ、何かを思わせていただきますが、その心の反応の中に、主神からの大切なメッセージがあると思います。

そのメッセージとは、私どもがどんなに至らない存在であっても、主神は私どもを必要としておられるということです。

主神は、ご自身の全く新しい創造をお進めになるために、どうしても私どもを必要としておられるのです。

だからこそ、主神は今、私どもを赦し、明主様に倣うものとして、大光明輝く天国に立ち返らせ、私どもを丸ごとお受け取りになり、私どもを養い育てながら、全く新しい創造のみ業にお使いくださっておられるのです。

このようにして、主神は、私どもが今も自らの中心に存在する天国でお仕えしている身であることを、明主様を通して思い出させてくださっております。

その主神に対し、私は、皆様と共に心からなる感謝を捧げさせていただきたいと思っております。

さて、私は、明主様に対し、私の祖父としてではなく、一人の信徒として出会わせていただくまでは、神様のことを、神様という言葉は知っていても、自分の思い描く幸福や幸運を願う時にだけ神様のことを思っていたように思います。

明主様のみ教えやお歌につきましても、お言葉の文字面だけの表面的な意味でしか受けとめておりませんでした。

明主様のお言葉は、人間の理解を遥かに越えたものであるにも拘らず、私は、自分の経験をもとに、人間的な知恵や尺度、既成概念のみ教えやお歌、また、ご事蹟を理解しようとし、明主様が本当にお伝えになりたいことに思いを向けることがありませんでした。

本当に申し訳ないことであります。

明主様は、そんな私を、長い眠りから目覚めさせてくださいました。

私は、自分の明主様のみ教えに対する理解、また、神様に対する信仰そのものが、いかに浅く、狭いものであるか、気づかせていただきました。

そして、そうした古い自分の姿に気づかせていただけることが、明主様の全く新しい営みの中で、すでに養い育てていただいている証しであり、また、その御用にお仕えさせていただいている証しであると感じさせていただきました。

このように私を目覚めさせてくださった明主様は、神様のことをどのように思っていらっしゃったのでしょうか。

ご自身のお若い頃のことを無神論者と仰せになっていた明主様は、後<sup>のち</sup>にご自身が信仰に目覚められるまでの歩みを振り返りながら、『入信の動機』と題するみ教えを私どものために残してくださいました。

そのみ教えによりますと、明主様は、ご自身の人生を歩まれる中で、度重なる苦難と致命的な打撃を被られたことがきっかけとなって、神様の存在に目覚められました。

そして、神様のお働きとしか思えないようなことを次々と体験される中で、明主様は、「そうだ確かに神はある。それも頗<sup>すこぶ</sup>る身近に神は居られる。否私自身の中に居られるかも知れない」と思うに至られ、その後、「それからは全身全霊を打ち込んで信仰生活に入ったのである」と述べておられます。

ご自身の中に神様はおられるという明主様の思いは、やがて確信となりました。

そして、神様のことを、心から信頼し、畏れ敬い、お讃えになりました。

誠に畏れ多いことではありますが、その神様は、唯一の神・主神であります。

その唯一であられる方が天地万物一切を創造し、今も刻一刻と創造をお進めになり、すべてを維持し、進化成長させながら、治めておられるのですから、主神は、唯一であると同時にすべてである、ということではないでしょうか。

そのすべての中に私どもも含まれていないはずはありません。

ですから、私どもの中のすべては主神のもので、心の奥底までも主神のもので。

主神は、私どもの中で一瞬たりともお働きになっていない時はありません。すべてをお使いくさっています。

明主様が、神の存在を懸命にお説きになったのは、このことだったのではないのでしょうか。

明主様は、ご自身が確信されたように、私どもの中には神様が存在し、神様の世界である天国が存在していることを、何としても気づかせてくださるうとして、ご自身の生きざまはもちろんのこと、数々のみ教えやお歌、また、天国のひな型である聖地の建設など、ありとあらゆる手段と方法をもって、眠っている私どもの魂を揺り動かし、目覚めさせてくださいました。

そして、明主様は、神の分<sup>わけ</sup>霊<sup>たま</sup>である人間のことを、「神の子」あるいは「神の宮」である旨お説きになり、人間を「神に似せて造った」という聖書の言葉は、確かに真理である」とみ教えくださいました。

明主様は、また、「人間には肉体の外に、肉体と同様な形をしている霊という無に等しき個体が、厳然として存在している」こと、そして、霊体と肉体とは密着不離の関係にあることをみ教えくださり、「人間の本体は心、すなわち霊にあり、霊こそ支配者であり、体は隷属者であるから霊主体従である」とお説きになりました。

考えてみますと、私どもが今、自分に命があると感じ、意識があると感じ、いろいろな感情を表現し、知恵を使い、思いを巡らすことができる体を持たせていただけたのは、自分の力で持たせていただいたものではありません。

私どもが今ここにいると感じるということは、私どもは、「神の子」であり「神の宮」として、主神の命と意識と魂からなる、主神ご自身のお体を継承させていただいているからではないのでしょうか。

人間の両親から生まれた子供が、両親と似た体を持つ人間であるように、私ども人間は、誰であろうと、神様と似た体である「霊体」、すなわち「霊の

体」を持たせていただいているのです。

しかも、すべては主神のものなのですから、私どもの「霊の体」は、主神のもの、主神の体なのです。まことに畏れ多いことでもあります。

この「霊の体」に主神は、神の子たる「メシヤ」という名前をお付けになった、と私は思います。

私どもは、神の子たるメシヤと名付けられた「霊の体」を持たせていただいているのです。

その「霊の体」が私どもの「本体」なのです。

このように、メシヤという名前は、まことに尊いお名前であるからこそ、明主様は、「明主の言霊は、メシヤと五十歩、百歩」と仰せになり、ご自身の教団に「世界救世（メシヤ）教」という名前を付けられるほど、そのお名前に大きな意味と働きがあることをお示しくださっていたのではないのでしょうか。

私どもが何かに名前を付ける場合、例えば、生まれたばかりの子供に対して両親が名前を付ける時、親としての願いと共に、精一杯の愛を込めて名前を付けるものであります。

そうであれば、私どもの本当の親である主神は、ご自身の子供である私どもにメシヤという名前をお付けになった時に、その名前の中に、ご自身の溢れんばかりの愛を込めておられないはずはありません。

この主神の愛とは、どのような愛なのでしょう。

愛と言いますと、私どもは、今日まで、人と人との間で愛を与えたり、与えられたり、届けたり、届けられたりするという愛しか知りませんでした。

あるいは、身近な動物や植物を始めとする万物に対する愛しか知りませんでした。

そして、愛を自分の価値を高めるための愛、自分の行いを誇るための愛としてしまい、社会一般でよく言われている利他愛や、他人を思っの道徳的行いによる愛が、神の愛の実践だと思い込んでおりました。

しかしながら、主神の愛は、人間同士の好き嫌いや善悪の判断で左右されるような、移ろいやすく、はかない愛ではありません。

愛があるかないか、愛が強い弱いか、などと比べるような愛ではありません。

私は、愛するというものの本質は、自分のものとするということであると思います。

主神の愛は、ご自身が創造されたものをご自分のものとする、すなわち、

私どもをご自身の子供とするという愛です。

この主神の愛こそ、メシヤという名前に込められている真<sup>まこと</sup>の愛であります。

私どもは、明主様によって、愛を自分のものとしていた過ちに気づき、私どもの中におられる主神が私どもを赦し、主神ご自身の子供とするという、真の愛があることを知ることができました。

私どもが主神を知ることができ、主神の愛を知ることができたことは、主神による赦し以外の何ものでもありません。

主神は、創造の始まりの天国において、メシヤと名付けられた、ご自身の「霊の体」を持つ子供をお生みになって地上にお遣わしになり、一人ひとりの人間としてくださいました。

それは、「霊の体」を持つ私ども一人ひとりを再び天国に迎え入れ、ご自身の子供として、もう一度新しく生まれさせるためです。

そのために主神は今、一生懸命私どもを養い育ててくださっています。

私どもは誰であろうとメシヤという御名に結ばれているのです。

天地万物一切は、メシヤという御名に結ばれているのです。

明主様は、その御名にある愛と赦しに応えられ、私どもを代表して人間の過ちを悔い改められ、ご自身を主神に捧げられました。

その思いをお受け取りになられた主神は、明主様を改めてご自身の子供として再びお生みになられたからこそ、明主様は、「メシヤが生まれた」、あるいは、「新しく生まれる」と仰せになることができたのだと思います。

私は、私どもがメシヤという御名に結ばれているからこそ、すべてのものと共に、赦され、救われているという、この大切な結びを忘れることのないようにしなければ、とっております。

明主様と共にあるメシヤの御名は、私どもの思いの中心に、しっかりと刻まれております。

たとえメシヤという御名に対する、私どもの理解と認識が僅かなものであったとしても、その御名に込められた愛、すなわち、主神が私どもをご自身の子供とするという愛は、すでに私どもの情感を通して全身の細胞を貫き、そして、ご自身の創造されたすべてのものを貫いております。

ですから、私どもは、メシヤの御名を知識として頭に留めているだけではなく、一人ひとりが、全人類の代表であるという自覚をもって、その御名に込められた真<sup>まこと</sup>の愛を、私どもの情感の中に豊かに満たしていただく思いで、息を吸ったり吐いたりさせていただき、全身に、手の先、足の先の細胞一つ

ひとつにまでも、お受けさせていただこうではありませんか。

本日は、春季大祭に併せて、豊穰祈願祭が執り行われました。

私どもが種を蒔き、栽培することによって、その種は、大自然の恵みを受けながら、芽を出し、次第に成長し、葉や花となり、実を結ぶことであります。

ここで私どもが大切にしなければならない思いは、種をお創りになった方は主神であり、また、その種を成長させてくださる方は主神であるということです。成長させる力は、主神のみがお持ちです。

そして、収穫する時期を迎えますと、私どもは、実った作物の出来栄を見て、選別いたします。

しかしながら、主神が収穫しようとしておられるのは、私ども自身です。

その場合、主神は、私どもを選別することはなさらず、誰であろうと、ご自身が種を蒔き、創り育てた大切な実として収穫してくださろうとしています。

ですから、私どもが主神のみもとに立ち返ることを意思表示し、メシヤの御名にある赦しをお受けするならば、私どもを誰でも選別することなく収穫して下さり、新しく始まる創造のみ業に、明主様と共にお使いいくだけではないでしょうか。

主神は今、私どもがメシヤの御名にある赦しを信じ、その赦しを受け入れるか否か、そのことを一人ひとりに尋ねてくださっているような気がいたします。

その主神に対し、私は今、皆様とご一緒に、次のような思いをもってお答えさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

“明主様と共にあるメシヤの御名にあつて、父母先祖の方々と共に、万物と共に、主神の赦しをお受けさせていただきます、”このみ恵みがすべてのものに分け与えられますようお使いください。お仕えさせていただきます、

“吸う息吐く息のうちに、み心を成し遂げてくださいますように。主神に委ねさせていただきます、”

ありがとうございました。

以 上